



杜 甫 I

吉川幸次郎 訳

世界古典文学全集

28

筑摩書房

杜 甫 詩

世界古典文学全集 第28卷

昭和42年11月30日発行

訳 者 吉 川 幸 次 郎

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2-8
振替東京 4123 電話(291) 7651

目次

杜甫詩集 卷一 書生の歌 上 自由詩部分

1	行政府長官なる韋濟 <small>いざい</small> のおじにたてまつる二十二脚韻 <small>（韋左丞 丈に贈り奉る二十二韻）</small>	8	16	庭さきの甘菊 <small>かんきく</small> の花をあわれむ <small>（庭前の甘菊の花を歎ず）</small>	50
2	高適 <small>たうてき</small> の文書掛参謀としての赴任を見送る <small>（高三十五書記を送る）</small>	17	17	酔った時間の歌 芸術大学教授鄭虔 <small>ていけん</small> 氏に <small>（酔時の歌）</small>	51
3	李白に <small>（李白に贈る）</small>	21	18	酔つてのうた 落第した甥を見送つて <small>（酔歌行）</small>	55
4	龍門 <small>りゆうもん</small> の奉先寺に遊んで <small>（龍門の奉先寺に遊ぶ）</small>	21	19	処士衛八郎にささぐ <small>（衛八処士に贈る）</small>	59
5	おやまの遠望 <small>（岳を望む）</small>	21	20	雨のなやみ 隴西公 <small>りゆうせいこう</small> 殿下にささげまつり あわせて王徴 <small>わいてう</small> 氏に	
6	北海郡太守李邕 <small>りよう</small> 氏のもとにして歴下亭にてのさかもり <small>（李北海に陪して歴下亭に宴す）</small>	26	21	ささぐ <small>（雨に苦しみて隴西公に寄せ奉り兼ねて王徴氏に呈す）</small>	
7	李邕 <small>りよう</small> 氏が作「歴下県の古城にて族孫李之芳が新しきあずまやを作りしに登りて」につげる歌 <small>（歴下の古城 員外孫の新亭に登る 北海太守李邕 前に同す）</small>	26	22	慈恩寺の塔にのぼる 人人のうたにつぎて <small>（諸公の慈恩寺の塔に登るに同す）</small>	
8	玄都壇の歌 山伏の元君に <small>（玄都壇の歌 元逸人に寄す）</small>	29	22	遠縁のまご <small>（杜済に）</small> 杜済 <small>（從孫の済に示す）</small>	
9	こよいのうた <small>（今夕行）</small>	30	23	菊の節句 岑参 <small>しんさん</small> に <small>（九日 岑参に寄す）</small>	64
10	貧乏人の友情のうた <small>（貧交行）</small>	30	24	孔巢父 <small>こうそうふ</small> が病氣辞職して帰り揚子江の南に旅するのを送りついでに李白に与える <small>（孔巢父の病を謝して帰り江東に遊ぶを送り兼ねて李白に呈す）</small>	69
11	戦車のうた <small>（兵車行）</small>	32	25	酒のくにの仙人八氏の歌 <small>（飲中八仙の歌）</small>	73
12	高司令があしげのうた <small>（高都護驃馬行）</small>	32	26	曲江 <small>きやうきやう</small> のうた三つ それぞれに五句 <small>（曲江三章 章五句）</small>	80
13	天育牧場の栗毛の歌 <small>（天育驃騎の歌）</small>	34	27	美人のうた <small>（麗人行）</small>	84
14	白ききぬ糸のうた <small>（白糸行）</small>	35	28	楽遊公園の歌 <small>（楽遊園の歌）</small>	88
15	秋雨の憂鬱三首 <small>（秋雨歎）</small>	40	29	漢 <small>ひ</small> のみずうみのうた <small>（漢陂行）</small>	92
		42	30	漢のみずうみ西南の眺望台にて <small>（漢陂の西南台）</small>	96
		44	31	芸術大学教授鄭虔 <small>ていけん</small> 氏へたわむれの手紙 あわせて大学事務局長蘇源明 <small>そげんめい</small> 氏にささげる <small>（戯れに鄭広文度に簡し兼ねて蘇司業源明に呈す）</small>	
		47	32	夏の日 <small>（夏日）</small> に李閣下の訪問をうけて <small>（夏日 李公訪わる）</small>	
		47	33	少納言郭君 <small>くわくくん</small> が温泉の東なる神泉にての作につぎまつりて <small>（郭</small>	

給事が湯東靈湫の作に同じ奉る)

34 よる許十郎が詩の朗誦をきき心はずみて成りしうた(夜る許

十の詩を誦するを聴き愛して作る有り)

35 橋陵のうた三十脚韻あわせて奉先県庁の諸君にささぐ(橋

陵の詩三十韻 因りて県内の諸官に呈す)

36 砂牧場の歌(沙死行)

37 あしげの歌(馳馬行)

38 いざさらばのうた(去矣行)

39 首都より奉先県に赴きし途上の感想五百字(京自り奉先県に

赴く詠懐五百字)

杜甫詩集 卷二 書生の歌 下 定型詩部分

1 冬の日に洛陽のみやこの北なる老子のみかどの神宮にもうで

て(冬日 洛城の北 玄元皇帝の廟に謁す)

2 旅のみちすがら太宗皇帝みささぎのかたわらにやどりて(行

きて昭陵に次す)

3 内閣官房長官韋濟おじにささぐ(韋左丞丈濟に贈る)

4 哥舒翰元帥にさしいたせし二十脚韻(哥舒開府翰に投贈す二

十韻)

5 左大臣韋見素氏にささぐ二十脚韻(韋左相に上る二十韻)

6 文化局長張均氏にささぐ二十脚韻(太常の張卿に贈り奉る

二十韻)

7 鄭審議官にささぐ十脚韻(敬んで鄭諫議に贈る十韻)

8 長安都長なる鮮于仲通氏にささぐ二十脚韻(鮮于京兆に贈り

奉る二十韻)

9 勳一等汝陽王殿下にささぐ二十脚韻(特進汝陽王に贈る二十

韻)

10 重ねて太宗皇帝のみささぎを過ぎて(重ねて昭陵を経)

11 鄭騎士が屋敷にて洞窟のさかもり(鄭騎馬宅 洞中に宴す)

12 李局長が家にて(李監の宅)

13 またも鄭が家の東の茶室をうたいて(重ねて鄭氏の東亭に題

す)

14 張氏が山のすまいにてよめる二首(張氏の隱居に題す二首)

15 つきやま(飯山)

16 竜門の峽谷(竜門)

17 洛陽市長なる韋のおじのみもとに(河南の韋尹丈人に寄せ奉

る)

18 李白に(李白に贈る)

19 任城、県の許書記官と南の池に遊びて(任城の許主簿と南池

に遊ぶ)

20 兗州城のやぐらに立ちて(兗州の城樓に登る)

21 劉九郎法務主事が瑕丘県知事鄭氏を石門にむかえてのうたけ

(劉九法曹 鄭瑕丘 石門の宴集)

22 臨邑県へしぼの旅して鵲山湖の茶屋に着き李之芳のきみ思

いやりてふと成りしうた(暫く臨邑に如き鵲山の湖亭に至

り李員外を懐い奉り卒爾として興を成す)

23 雨の日のものおもしろい許十一郎書記官のきままねかんとて文や

る(雨に対して懐いを書し走らせて許十一簿公を邀う)

24 己上人が庵室(己上人が茅齋)

177 171

165 159

156 151

145

129

128 125 121 112

109

102

180

197 194 192 186

204 203 200 199

208 205

210 209

212

213

216 215

25 房兵員課長がアラビア馬のうた（房兵曹胡馬の詩）
 26 鷹の画に（画鷹）
 27 李白とともに范十郎がいなかやをおとすれて（李十二白と
 に范十の隠居を尋ぬ）
 28 臨邑県の弟より書簡到着 豪雨のため黄河氾濫 堤防の世話
 所管事務として大変なりという さらばとこの詩を送り
 彼の気もちをやわらげる（臨邑の舍弟の書至る 雨に苦し
 み 黄河氾濫して 堤防の思ふ 簿領の憂うる所なりと
 因りて此の詩を寄せ 以つて其の意を寛うす）
 29 人事課長宋之間大人がかつての別荘をよぎりて（宋員外之間
 の旧荘を過ぎる）
 30 左の家の莊園にてのよるのうたげ（夜る左氏の莊に宴す）
 31 蔡希魯隊長の甘肅への帰還を送りあわせて高適に寄す（蔡希
 魯都尉の隴西に還るを送り因りて高三十五書記に寄す）
 32 春の日に李白を懐う（春日 李白を憶う）
 33 陳侍從に（陳二補闕に贈る）
 34 高適に書きおくる（高三十五書記適に寄す）
 35 裴虬が永嘉県の警察長となるを送る（裴二虬の永嘉に尉と作
 るを送る）
 36 都の西なる池に舟をうかべて（城西の陂に舟を泛かぶ）
 37 田梁丘幕僚長に（田九判官梁丘に贈る）
 38 投書函係りの皇帝秘書田澄氏に（猷納使の起居田舎人澄に
 贈る）
 39 韋氏が安西都護府書記官としての赴任を送る（韋書記の安西
 に赴くを送る）

244 242 241 240 238 237 236 234 231 229 228 224 220 218 217

40 鄭芸術大学教授にともなわれ何將軍の山莊に遊ぶ十首（鄭広
 文に陪して何將軍の山林に遊ぶ）
 41 ふたたび何氏の家をおとすれて五首（重ねて何氏を過ぎる）
 42 冬の日李白を思いやることありて（冬日 李白を懐う有り）
 43 甥杜位が家にての年越し（杜位の宅にて歳を守る）
 44 鞏県の事務官源一郎君が漢のみすうみのさかもりにて（鞏県
 の源大少府と漢陂に宴す）
 45 崔驛士が山莊にてのうたげ（崔驛馬山亭宴集）
 46 菊の節句に楊奉先果知事が崔白水果知事をむかえてのつどい
 （九日 楊奉先 白水の崔明府を会す）
 47 内大臣張垣氏に（翰林の張四学士に贈る）
 48 張属官が蜀州への赴任を見送りあわせて楊長官に（張二十
 參軍の蜀州に赴くを送り因りて楊五侍御に呈す）
 49 貴公子たち丈八溝にて妓をともないての納涼に招かれ暮れん
 としして俄か雨二首 諸公子の丈八溝に妓を携えて涼を納る
 るに陪し晩際にて雨に遇う二首）
 50 白水果知事なるおじの家にて雨をことほぐうた（白水明府舅
 の宅にて雨を喜ぶ）
 51 警視庁李氏の花見酒に招かれて（李金吾に陪して花の下に飲
 む）
 52 高式顔に（高式顔に贈る）
 53 法務省会計検査課長蕭の兄に（比部の蕭郎中十兄に贈る）
 54 菊の節句 曲江公園にて（九日曲江）
 55 任官確定のち戯れにある人に（官定まりし後戯れに贈る）
 56 沈東美のおじ文部省食品課長補佐に転任したもうと聞けど雨

287 286 283 282 280 279 278 276 272 270 269 268 265 264 258 246

にさまたげられかけつけての祝詞かなわざるままに人にも
たせやりし歌（沈八丈東美膳部員外に除せられしと承るも
雨に阻まれ未まだ馳賀を遂げず此の詩を寄せ奉る）

57 都を出でんとして宮廷文学院の崔于二所員にささぐ（集賢院
の崔于二学士に留贈し奉る）

58 近衛部隊長葬送曲三首（故の武衛將軍の挽詞三首）

あとがき

杜

甫

I

杜甫詩集 卷一 書生の歌 上 自由詩部分

杜甫の詩作の開始は、幼年にあつた。晩年に書かれた「壯遊」の詩に、「七つの齡にして思いは即くも壯んに、口を開きて鳳凰を詠じぬ」と追憶し、十四五歳のときには、先輩たちの詩会につらなつたという。二十代、まず南方、江蘇浙江の地帯に放浪し、ついで東方、河南の地帯で、李白、高適と、「意を快くすること八九年」なるに及んで、その文学は、質も量も、一そう卓越しはじめたであろう。しかしそれら三十歳以前の詩は、原則として伝わらない。あだかもそれは、杜甫が生まれた七一二、その年に即位した玄宗皇帝李隆基が、唐帝国開国以来すでに百年、うちつづく太平を、まず開元の年号で、二十九年間、主宰した時期に相当するが、この開元の時期の詩は、ほとんど伝わらない。かえって必ずしも得意としない散文の数篇が伝わる。詩が伝わるのは、三十歳前後、玄宗が年号を天宝と改めた七四二のころからである。明の王嗣奭の説に、習作としてみずから棄てたか、という。つまり全詩集のはじめとなるのは、玄宗の治世四十五年の後半三分の一、天宝年間のものである。それ以前のものも多少は混在するかも知れぬが、混在するとしても少数である。いまそのうち、「古詩」すなわち句中の韻律に拘束のない自由詩形のもの四十三首を、この私の書物の巻一とする。玄宗皇帝と楊貴妃とを主役とする繁栄の時期のさなかにはじまり、七五五、四十四歳、天宝十四年十一月、安祿山の反乱によって、太平が一挙にくつがえる直前までの作である。同時期の定型詩、すなわち「律詩」七十五首は、次の巻二に収める。私が底本とする宋の王洙の本でも、巻一に収める詩の大部分が、すなわち私のこの書物でも巻一

であり、排列の順序も王洙による。詩の作られた背景として、継続する繁栄の中に、退廃はすでに顕著であつた。玄宗皇帝は、前半生に示した政治への情熱を、三十三年下の愛人、楊貴妃への愛へとうつし、政府の首班は、奸佞な李林甫、ついで楊貴妃の従兄、もと四川省の博徒、楊国忠であつた。また皇帝のもつとも寵遇する將軍は、やがて叛旗をひるがえす安祿山であつた。西方の吐蕃すなわちティベットの対立を中心として、擴張政策は維持され、重税と徴兵による農村の疲弊が、首都長安の繁栄と、反比例した。そうして杜甫は、終始、不遇の書生であつた。二十代のある年、国家公務員試験に落第したのを、挫折のきつかけとして、天宝六年、三十六歳、皇帝の特命による特別試験にも、宰相李林甫の妨害により、及第しなかつた。天宝十年、四十歳には、美文「三大礼の賦」を、皇帝に献じ、十三年には更に「西岳に封する賦」を献じたが、期待したほどの反応はなかつた。しきりに大官に詩をおくり、政府に地位を得べく、見ぐるしいまでに、運動している。それとともに、太平がいつかは招来すべき危機への予感が、鋭敏にあつた。長年の志望を達して、四十四歳、右衛率府の兵曹參軍、皇太子禁衛軍の兵員課長、従八品、に任ぜられたのは、安祿山叛乱勃発の数か月前である。詩のおおむねは、首都長安で作られていよう。当時の長安の人口は、近郊をあわせて一九九十六万七千一百八十八、戸数は三十六万二千九百二十一、そうして帝国全体の人口は、四千八百一十四万三千六百九、戸数は八百四十一万二千八百七十一と、開元年間の統計が、「旧唐書」の「地理志」に記録されている。長安は、当時の地上最大の都会であり、唐は地上最大の帝国であつた。日本では、杜甫三十一歳の天宝元年が、聖武天皇の天平十四年、杜甫四十四歳の天宝十四年が、孝謙天皇の天平勝宝七年、憶良、家持の時期であり、奈良の大仏が作られつつあつた。以上、詳しくは吉川「杜甫私記」第一巻参照。

1 行政府副長官なる韋濟のおじにたてまつる二十二脚韻

絹のふんどし のたれ死にのためしなく
 学者の冠 しばしば出世のさまたげ
 おじぎみよ まずはおききとり下さい
 拙者 いちいちに申し述べましよう
 わたくしはじめ青年のころ
 早くも郷貢生の数に入りました
 書物は一万冊を読み破り
 筆をおろせば神がかりのよう
 長歌はどうやら揚雄のあいて
 みじか歌はてつきり曹植の身うち
 李邕氏は顔を見たいといい
 王翰氏は隣へひっこして来たいという
 自分でもなかなかの偉物と思ひこみ
 すぐにも重要な地位につくつもり
 皇帝を堯舜よりも上位にみちびきまいらせ
 もう一ど うつくしい世の中に入りたいと
 そうした意気ごみ けつきよくはうらぎられ
 世すて人ならぬに 道のべのうた
 驢馬にまたがって三十年
 花の都の春の浮浪人
 朝は成金の門をノックし
 夕方にはたくましい馬の塵をおつかける
 のみのこしの杯とさめたステイク
 どこでもくいしばる函
 みかど先だってお召しあり
 えいやと鬱屈をはらすつもりを

青空はあやにくに羽根をしおたれる場所
 あつぷあつぷと自由な魚の夢は消えました
 何とも気はずかしいのはおじぎみの愛情
 何とも分るのはおじぎみの誠実
 いつも部下たちと会議の席上
 もったいなくも口にされるのはわたくし近作の詩句
 貢禹氏の嬉しさをまねたくは思いますが
 我慢ならぬは原憲もどきの貧乏
 所在なやむつくりと腹を立て
 びよんびよん走りまわってばかりいられますか
 さあもう東の海に舟出します
 つまり秦のくにを西に見すてます
 さすが終南の山なみにみれんはのこり
 清らかな渭水の岸べをふりかえります
 一度の食事にも恩返ししたいのが平生の主張
 ましていまの気持は大臣とお別れするのです
 ああ 無限へと消えゆく白いかもめ
 行く手は一万里 誰もわたしを手なづけられない

奉贈韋左丞丈二十二韻
 1 紈袴不餓死
 2 儒冠多誤身
 3 丈人試靜聽
 4 賤子請具陳
 5 甫昔少年日
 6 早充觀國賓
 7 讀書破萬卷
 8 下筆如有神
 9 賦料揚雄敵

韋左丞丈に贈り奉る二十二韻
 紈袴 餓死せず
 儒冠 多く身を誤る
 丈人 試みに静かに聴け
 賤子 請う具さに陳べん
 甫は昔し少年の日
 早くも觀國の賓に充てらる
 書を読み破りて萬卷を破り
 筆を下せば神有るが如し
 賦は揚雄の敵と料られ

- 10 詩看子建親
- 11 李邕求識面
- 12 王翰願卜鄰
- 13 自謂頗挺出
- 14 立登要路津
- 15 致君堯舜上
- 16 再使風俗淳
- 17 此意竟蕭條
- 18 行歌非隱淪
- 19 騎驢三十載
- 20 旅食京華春
- 21 朝扣富兒門
- 22 暮隨肥馬塵
- 23 殘杯與冷炙
- 24 到處潛悲辛
- 25 主上頃見徵
- 26 欵然欲求伸
- 27 青冥却垂翅
- 28 蹭蹬無縱鱗
- 29 甚愧丈人厚
- 30 甚知丈人真
- 31 每於百寮上
- 32 猥誦佳句新
- 33 竊效貢公喜
- 34 難甘原憲貧
- 35 焉能心快快
- 36 祇是走踐踐
- 37 今欲東入海
- 38 卽將西去秦

詩は子建の親と看なさる
 李邕は面を識らんことを求め
 王翰は隣りを卜わんと願う
 自ずから謂えらく頗る挺出せり
 立ちどころに要路の津に登らん
 君を堯舜の上に至らしめんと
 再び風俗をして淳からしめんと
 此の意、竟に蕭條
 行歌、隱淪に非ず
 驢に騎ること三十載
 旅食す京華の春
 朝には富兒の門を叩き
 暮には肥馬の塵に隨う
 殘杯と冷炙と
 到處、潛かに悲辛す
 主上、頃、微ざれ
 欵然として伸びるを求めんと欲す
 青冥、却つて翅を垂れ
 蹭蹬、縱鱗無し
 甚だ丈人の厚きに愧じ
 甚だ丈人の真を知る
 毎に百寮の上に於いて
 猥りに佳句の新しきを誦す
 竊かに貢公の喜びに効うも
 甘んじ難し原憲の貧
 焉んぞ能く心快快として
 祇だ是れ走りて踐踐たらんや
 今、東のかた海に入らんと欲し
 卽ち將に西のかた秦を去らんとす

- 39 尙憐終南山
 - 40 廻首清渭濱
 - 41 常擬報一飯
 - 42 況懷辭大臣
 - 43 白鷗沒浩蕩
 - 44 萬里誰能馴
- 尙お終南山を憐れみ
 首を廻らす清渭の浜
 常に一飯にも報いんと擬す
 況んや大臣に辞するを懷うをや
 白鷗、浩蕩に没す
 万里、誰か能く馴らさん
- 久しきにわたる失意の生活にあいて、首都長安を去り、何度目かの東方の旅に出ようとしたとき、パトロンの人であり、政府の要人として尚書左承の職にある韋済に、おこつた詩。詩を呈せられた韋済は、その祖父韋思謙、その伯父韋承慶、その父韋嗣立、あいついで宰相となつた官僚貴族である。唐の官制は、勅旨による政令を起草する中書省、それを審議する門下省、審議された政令を実行にうつす尚書省、以上の三権分立であつたが、尚書省すなわち行政府の複数の次官の一人が、尚書左丞であつて、官等は正四品上。韋済の伝記は、「旧唐書」の列伝卷三十八、「新唐書」の列伝卷四十一、いずれも父祖の伝記のうちに附載するが、彼がこの職にあつたのは、玄宗の天宝七年以後であるから、詩の作られた時期も、おのずからその範圍にある。しかも以下以下の詩のあるものよりも、制作の時期はむしろおそからうが、王洙の宋本が開卷第一におくのは、早年の杜甫の境遇と心理とを、総括的に率直に示すからである。ただし天宝十年、四十歳、「三大礼の賦」を献上されたことは、詩中に見えないから、それよりも前であるう。
- 〔韋左丞丈〕韋済におくつた詩は、次の卷二にも、二首見えるが、ここで「丈」と呼ぶのは、先輩の老人を親愛をこめて呼ぶ語。おそらく姻戚の關係にあつた。〔二十二韻〕二十二の脚韻、つまり四十四句の長詩であることを意味する。中国詩の通例として、二句ずつが一聯であり、聯の終りにごとくに、脚韻をふむ。この詩では2の身、shen、4の陳、chen、6の賓、bin、8の神、shen、以下、42の臣、chen、44の馴、xunに至るまで、おなじ声調のおなじ母音の語を脚韻とする。〔二十

「二韻」は相当の長詩であり、内容もそれに応ずることを、題が予告している。宋の無名氏の「分門集注杜工部詩」では、その巻十七「投贈の類に、宋の蔡夢弼の「杜工部草堂詩箋」では、その巻三に、清の仇兆整の「杜詩詳注」では、その巻一に収める。九家注、すなわち宋の郭知達の「九家集注杜詩」は、この書物の底本とする王洙の本と、編次ほとんど同じであり、したがってこの詩が開巻第一首であることも同じ。また他書への引用としては、唐の王定保の「唐摭言」十二に、全詩を載せるのが、注目される。なお詩を贈られた「韋左丞」が韋済であることは、宋の鮑文虎以来の定説。蔡夢弼が韋見素とするのはいけな。

1 「執袴」(「執」はしろぎぬ。「袴」は今の中国語の褲の字。下着としてのパンツ。下着まで絹もの人間とは、それによって貴族の子弟を意味させる語。一世紀、漢の班固の「漢書」の「叙伝」の篇に、「綺襦執袴」の語があり、その注に「貴戚の子弟の服」という。「綺襦」も絹のシャツである。ただしそれは杜甫の時代の現実であるよりも、杜甫より千年弱前の漢の時代の事象であるが、かく古代の事象をいう語を借りて、現在の事象をいうのは、杜詩常用の技法。なお杜甫がもつとも語彙の源泉とした前代の詞華集「文選」では、「執袴」の語、その巻四十、梁の任昉が劉整を弾劾した文章に、使われている。「不餓死」貴族の子弟が餓死しないのは、生活に不自由しないばかりでなく、ハンガー・ストライキをするほどの抵抗力もたないからである。後者の事例として、最も早くまた最も有名なのは、「論語」の「季氏」篇、また「史記」の列伝の第一「篇に見るようには、周の武王の武力革命に反抗して、伯夷と叔齊が、新王朝の粟を食わず、首陽山で餓死したこと。なお「餓死」の語、散文には早くから見え、「史記」のその文章で、「遂に首陽山に餓死す」といい、また「漢書」の朱買臣の伝に、「不遇時代の彼に、妻があいそやをつかし、あなたのような人は、「終に溝中に餓死せん耳」といったのなど、みなその用例である。しかし従前の詩でこの語を用いた例は、「文選」の詩をも含め

て、検出し得ない。ほとんど杜甫のこの詩に至って、はじめて現れる。杜甫の詩の現実性は、開巻の第一行に、すでに示されている。

2 「儒冠」孔子をはじめ、古代の「儒家」の人人が、学派の象徴として、特別な冠をかぶったこと、「礼記」の「儒行」篇その他に見え、「莊子」の「田子方」篇によれば、「儒者の円き冠を冠るは、天の時を知る也」。ただしこれも古代の事象であり、杜甫の時代の現実でない。

杜甫の時代、儒学は民族の教養として普遍であり、杜甫はことにその教えに忠実であったけれども、もはや儒者のための特別な冠は存在しなかった。古代の儒者の冠が、かえって「身を誤る」挿話としては、漢の高祖が、面を求めに来た儒者の冠をはぎとり、その中へ小便をしたと、「漢書」の酈食其伝にいうのが、想起される。「多」度数の多さをいう。しばしば。「誤身」この語使用の前例を知らぬ。その意味は、日本語の身をあやまるが、不道德によって身をもちくずすのであるのとはこととなり、訳のごとき意味。「儒冠」をかぶり、儒者としての道徳と教養をもつことが、かえってしばしば立身の妨害となる。

3 「丈人」古典では、「易」の「師」の卦辭、「論語」の「微子」篇などの語であり、老人の意であるが、漢代の歌謡「楽府」では、嫁が舅にむかって、「丈人よ且つは安らかに坐せよ」と呼びかけているように、親属の老人を、親愛の情をこめて呼ぶ語となつてゐる。杜甫は、姻戚あるいはそれに似た関係にある長老を、しばしばこの語で呼ぶ。韋済もそうした関係にあつたと思われ、さればこそ詩題にも、「韋左丞丈に贈り奉る」と、「丈」の字を加える。二つの家は、古く漢代から「城南の章杜」と並称されて、同じく長安の南郊を本籍とし、近い世代でも通婚してゐたであらう。「試」ころもに。「静聴」心をこめてしずかにきく。「文選」四十七、晋の劉伶の「酒の徳の頌」では、この語、「孰視」と対になつてゐる。なお「丈人試静聴」というこの句、前に引いた漢の歌謡「丈人且安坐」を連想させ、口語歌謡の口吻である。杜甫は、榮養を古典的なアンソロジー「文選」に求めるとともに、時には歌謡民謡をも自在に摂取して、詩を活潑にする。

4 「賤子」卑称の一人称。この句、「文選」二十八に収める宋の鮑照の歌謡「東武吟」に、「主人よ且つ讀しき勿かれ、賤子は一言を歌わんにまね、やはり歌謡の口吻である。ただし杜甫のいいたいことは、「一言」でいいつくせない。ゆえに「具」さに「陳」述する。「請」うは、相手の許可を得て。なお「具陳」といういい方、「文選」二十九、漢の無名氏の「古詩十九首」に、「今日の良き宴会、飲菜は具さに陳べ難し」と見え、その李善の注に「陳は述ぶる也」。

5 「甫」尊者に対するもつとも丁寧な一人称としては、実名をいう。「昔」今の日本語のように遠い過去ばかりでなく、近い過去をもこの語でいう。「少年」今の日本語の意味する時期よりもやや年長の時期。二十前後の青年期。「少年日」といういい方は、「文選」二十、梁の沈約が友人と別れる詩に、「生平少年の日」というのが、意識にある。

6 「觀国賢」郷里の地方庁から推薦され、「科挙」すなわち公務員試験の受験資格者として、首都長安に来たことを意味する。表現は、「易经」の「觀」の卦の、「国の光を観る、王の賓となるに利し」を、借りる。「国」は国都。杜甫がこの榮譽をもったのは、玄宗皇帝の開元二十三年、七三五、二十四歳以前のことである。しかし結果は落第であった。「杜甫私記」第一卷六八頁参照。

7 「読書破万卷」似た表現の先例として、宋の趙彦材は、梁の元帝蕭繹が、その国都の落城に当り、聚集の図書十四万巻を焼きすて、「書を読むこと万巻なるも、猶お今日のこと有り、故に之れを焚く」を挙げ、中間の「破」の字、力を着めて新奇なり、と評する。案ずるに元帝の語は、宋の司馬光の「資治通鑑」百六十五に引く。杜甫の不遇は、元帝のように、非業の死には至らない。しかし「読破」した「万巻」が無益であることは、同じである。かつての不幸な皇帝の語が、杜甫の頭をかすめなかつたとはいえぬ。

8 「神」必ずしも超自然の存在を意味せぬ。常識を超えた能力。なお「下筆」も「有神」も、「文選」に見える語。前者は、五十二、魏の文帝曹丕の「典論論文」に、後漢の傅毅の文章の、これは冗漫にわたり

がちなのを、同僚の班固がけなした語として、「筆を下せば自ずから休む能わず」。後者は、三十七、後漢の孔融が、文士の禰衡を推薦する文章に、「思いは神有るが若し」。

9 「賦」脚韻をふみつつ叙述を展開する長篇の美文。漢から三国六朝を経て唐初までの文学の、重要なジャンル。「揚雄」前漢末の文人また学者、BC五三—AD一八、「賦」の文学の大家。「文選」に収める「甘泉の賦」「羽獵の賦」「長楊の賦」みな極度の美文である。「料」「広韻」に「度り量る也」。「広韻」は宋初に編集された音引きの辞書であるが、杜甫のころの標準的な辞書「切韻」を基礎とする。「敵」匹敵、好敵手。

10 「賦」が長大なのに対し、短い抒情詩である「詩」が、文学のジャンルとして確立するのは、「賦」よりおくれ、三世紀三国時代からであるが、貴公子曹植、字は「子建」、一九二—二三三を、ことに中心とした。「親」は親類、身うちの意であろうが、「看」の字の訳は、不たしか。「唐摭言」に引用するものは、「詩將子建親」に作る。それならば、詩は子建と親類の意となる。要するに、長歌は人麿の仲間、短歌は貫之の親類というほどの、自負の語である。「文選」二十一、晋の左思の「詠史の詩」が、みずからの文学の才能を、漢の賈誼、司馬相如に比し、「論を著しては過秦に准じ、賦を作りては子虚に擬す」と豪語するのと、匹敵しよう。そうして杜甫の時代では、「賦」も「詩」も、公務員試験の重要科目であり、それに長ずることは、文学者としての将来ばかりでなく、政府要員としての将来をも約束した。

11 「李邕」当時の文壇の最長老。六七八—七四七。「旧唐書」「文苑伝」上、「新唐書」「文芸伝」上に、伝がある。「文選」の注を書いた李善の子。父の「文選」研究の協力者として、博学であるとともに、太っ腹な親分肌の人物であり、官吏としても高官であったので、後輩の世話をよくした。この句によれば、杜甫は幼時からその知遇を受けている。彼におくった詩が、すぐ次の67としてあるほか、晩年、尊敬する先輩八人を追慕した長詩「八哀」の一つも、彼にささげられている。

そもそも杜甫が、みずからの文学の榮養源を、常に「文選」に求めるのも、いわゆる「文選学」の大家であるこの人物の弟子であったことと、関係しよう。七十卷あったというその詩文は、いま部分的のみに伝わる。「識面」この語の「識」は知と同義。先だつ用例として、宋の杜修可の「統注」は、北斉の神武帝高歡が、有能の檢察官宋遊道に就めてあつたとき、「此の人宋有道なるか。常に其の名を聞きしが、今日始めて其の面を識る」といったのを、あげる。案ずるに語は、「北齊書」の「酷吏伝」、また「北史」のその伝に見える。しかし従前の詩には、この語を用いた句を、検出し得ない。散文の語、会話の語ではあつても、従来の詩人があえて用いなかつた語、それらの自由な採用も、杜詩の有力な一面である。

12 「王翰」やはり酒と女性とはくちと、そうして後進とを愛した「豪健恃才」の文士と、「新旧唐書」の伝にいう。官吏としては微官に終つた。十卷あつたという詩文は、いま詩十四首、文一首のみが伝わる。「卜隣」「左伝」の昭公三年に、ひっこしは隣人のよしあしこそ大切、「宅を是れトウに非ずして、惟れ隣りをこそ是れトウ」というのに、基く語。

13 「挺出」この語を使用した先例として、三世紀、蜀の將軍呂凱が、諸葛亮をたたえて「今や諸葛丞相は、英才挺出」と、敵將に与えた書簡でいつたことが、三国志のその伝に見える。ただし「唐撫言」および分門集注に引く一本は、「挺生」に作る。

14 「立」たちどころに、ただちに。現代中国語の立刻 立刻。古い散文では、「史記」の平原君伝、荊軻伝などに、すでに使用されているが、「文選」の美文的な詩文には、全く見えない。やはり杜詩の語彙の自由さ、活潑さである。「要路」政府の枢要の地位。「津」とはそれが川のわたり場のごとくであるのに見立てる。「要路の津」は、「文選」二十九、漢代無名氏の「古詩十九首」に見える語。

15 「致」ある極点まで対象を推進する。「君」むろん当代の君主、玄宗皇帝をさす。「堯舜」古代の理想的な社会を主宰した理想的な君主と

して、「書経」その他儒家の古典に見える二人の聖人。君主の輔佐者たるものの任務は、君主をして古代の堯と舜の再現とならしめることにあるとは、紀元前の哲学者、孟子の早く説くところであつて、その「万章」上篇に、殷の賢人伊尹は、はじめ在野の一農夫として、堯舜の道を個人的に楽しんでたが、「吾れ豈に是の君をして堯舜の君とならしむるに若かんや」と悟つて、湯王の輔佐となつたという。また偽「書経」の「説命」下篇にも、伊尹の語として、「予れ厥の君を俾て惟れ堯舜たる克わ弗らしめば、其の心愧じ恥じて市に撻うたる若し。「書経」のこれらの篇は、魏晉のころの偽作であるけれども、杜甫のころはまだその偽作が気づかれなかつた。杜甫も、伊尹とおなじく、みずからの君主を堯舜と同等にしたいと熱望したのであり、それはこの句のみならず、終生の思想であつた。この詩とはほ同時の作「比部蕭郎中兄に贈る」卷二五にも、「君を致すは時已に晚く、古を懐いて意空しく存す」、晩年の作では、裴道州の書簡に答える詩に、「此の生は已に愧ず人の扶くるを須つを、君を堯舜に致すことは公等に付す」、賢人王季友をたたえた詩に、「君を堯舜に致すこと焉んぞ肯えて朽ちんや」。このこと彼にさきだつた文学にも、見えない思想ではない。「文選」四十二、魏の庾嶷が従弟たちに与えた書簡に、「昔し伊尹は耕しを輟めて、君を有虞に致さんことを思ふ」、また三十八、梁の任昉が、齊の蕭子良の功績をたたえた文章に、「尊主の間は、之を堯舜に致す」、「文選」以外では、晋の王羲之が時事を論じた書簡に、「古人は其の君の堯舜と為らざるを恥す」。また杜甫と同時の詩人である王维が、宰相張九齡にさされた「張令公に上る詩」に、「君を致して帝典に光く。いずれも杜甫の場合のごとく熱烈にはひびかない。ことにこの詩では、「君を堯舜の上に致す」と、玄宗を堯舜以上の地位にまで推進したいという。

16 「風俗」人民の生活の基本的な感情と習慣。漢の班固の「漢書」地理志「下に、「凡そ民はみな五常の性を函むも、而かも其の剛柔緩急音声の同じからざるは、水土の風氣に繋むる。故に之れを風と謂う。

好悪取捨動静の常無きは、君上の情態に随う、故に俗と謂う」と、定義する。かく「風俗」は「君上」すなわち君主の感情慾望に追隨するものゆえ、「君を堯舜の上に致せば」、軽薄な「風俗」をば、「再」び古代の堯舜の世のごとく「淳」くすることが可能である。「孝経」の「風を移し俗を易う」、「詩経」の「大序」の「風俗を移す」、みその可能性をいう。なお「風俗淳」の三字を連用した先例として、趙彦材は竹林の七賢の一人、嵇康が、その自由な言論を、官僚の鍾会からさらわれ、「宜しく讐に因りて之れを除き、以て風俗を淳くすべし」と誣告され処刑されたと、「晋書」のその伝に見えるのを引く。また「唐撫言」の引用は、「風俗」を「風化」に作る。

17 「竟」けつきよく。結論としては、「蕭条」わびしい、さびしい、むなし、空虚、そうした感じを、*xiao tiao* と同母音を重ねた音声に托した語。ただし従来の文学では、「楚辞」の「遠遊」篇に、「山は蕭条として獸無し」というのはじめ、おおむね自然の風景についていうのを、ここは心理に施した。この句、具体的な内容としては、公務員試験に落第し、君主を輔佐する地位を得なかつたことをいう。なお「唐撫言」の引用は、「蕭条」を「蕭索」に作る。

18 この句の解、他の説もある。今新しく説を立てる。「行歌」道を歩きながら歌をうたうことであるが、「文選」には、この語、三度見える。すなわち四十三、晋の嵇康の「山巨源に与えて交りて絶つ書」の「子房の漢を佐くると、接輿の行歌すると、其の揆一也」、また四十七、晋の袁宏の「三国名臣序贊」の、「接輿之れを以て行歌し、魯連之れを以て海に赴く」、および三十九、梁の江淹の「建平王に詣りて上書す」の、「夫れ魯連の智は、禄を辞して返らず、接輿の賢は、行歌して帰るを忘る」であるが、三度とも、「行歌」の二字は、楚の隱遁者である接輿の行為として、いわれている。すなわち「論語」の「微子」篇に、「楚狂接輿、歌うて孔子を過ぎりて曰わく、鳳や鳳や、何んぞ徳の衰えたる」云云という条にもとづくものである。杜甫は「文選」に熟習しており、その用語は、しばしば「文選」の用例を意

識する。この「行歌」の二字も、そうであるとすれば、試験に落第し、「君を堯舜の上に致そう」とする希望を「蕭条」と裏切られてのちは、孔子をやじつた楚狂接輿のように、時政を批判する歌を、行のべにまきちらすばかりであった。ただし重要な差違として、楚狂接輿は「隱淪」、世の中から隠れ淪んだ世捨て人であったが、おのれはそうでない。世事に志あるものである。しかも接輿のごとく、「行歌」のみが自己の仕事であったというのが、「行歌非隱淪」行歌は隱淪に非ず、というこの句の意であると思われる。神仙に近い隱者の「隱淪」と呼ぶことは、やはり「文選」十二、晋の郭璞の「江の賦」の「隱淪の列仙を納れ」、二十六、晋の謝靈運の「華子岡に入る」詩の「既に隱淪の客を枉ぎ」などの李善注に、その説がある。もつとも「隱淪」の語は高尚な隱遁者よりも、貧賤な下積みの人間を意味する場合があり、「文選」二十二、宋の鮑照の詩に、「尊賢なるものは永く照り灼き、孤賤なるものは長く隠れ淪む」とい、その李善の注に、「幽隱沈淪を謂う也」というのは、その例である。もしそうだとすれば、「非」を否認の意に読み、幽隱沈淪の境涯を非いつつ行歌した、「行歌隱淪を非とす」と、読めぬこともないようであるが、そうではないであろう。古人の説では、九家注や分門集注に引く宋の趙彦材の説が私の説に近く、私の説もそれにみちびかかれているが、隱者の「行歌」の例を、「列子」「天瑞」篇の林類にのみ求める点が、不充分である。

19 「騎驢」〔騎〕は動詞、のる。「驢」すなわちろばは、不景気なりのりもの。普通の人は、馬に乗る。「騎驢」の故事として、分門集注の王彦輔は、「後漢書」「独行伝」の向栩の条を引き、この奇人は、「或るときは驢に騎りて市に入り、人に乞ふす」といふ。分門集注の杜定功が、後漢の李尤も、「驢に騎りて村を馳すれば、狐も兎も驚き走りぬ」といふのは、出所を知らぬ。何にしても騎驢は、奇矯な貧乏人の行為である。「三十載」〔載〕は年と同義。三十を実数とすれば、杜甫の伝記と合致しないとし、十三の誤倒とする説が、清の仇兆鰲の詳注などにあるが、愚鈍拘泥の説である。杜甫は長年の放浪を、「文選」二十六、

晋の陶淵明の紀行の詩の「閑居すること三十載」、また二十三、梁の任昉が友人范雲を哭した詩の、「飲りを結ぶこと三十載」などを想起しつつ、この語でいったのである。ただし「唐摭言」の引用は「三十年」。

20 「旅食」この語、杜詩に七度見え、大たいは旅さきでの食事、旅人としての食事を意味する。しかし雑然たる食事の意をも兼ね含もう。そもそも「儀礼」の「燕礼」篇に、儀式の末に連なる一種の人物をいう語として見え、漢の鄭玄の注に、正式な官吏でなく、雑多な禄をはむ嘱托の身分の人間の意味とする。「旅は衆なり。士の衆食するとは、

未まだ正しき禄を得ざるを謂う。謂わゆる庶人の官に在る者也」。また「文選」四十二、魏の文帝曹丕が、友人呉質に与えた書簡に、かつてのパーティの楽しさを回想し、「南館に旅食す」というのは、雑然たる食事、ビュフエ、の意らしいが、そこでも李善注は、上掲の「儀礼」の注を引く。雑然たる禄と、雑然たる食事とは、両者相関連するというのが、李善の考えであろう。「文選」とその李善の注との学に篤かった杜甫は、それらのことどもをも記憶して、この語を使ったのではないか。当時の杜甫は官吏候補者たるに止まり、官吏ではなかった。いわばあてがい扶持の身分であり、また実際にたべる食事も、次に

〔残杯と冷炙と〕というように、雑然たるあてがい扶持であった。「京華」みやこをそのはなやかさよっていう詩語。「文選」二十一、晋の郭璞の「遊仙」詩では、「京華は遊俠の窟」の句が、「山林は隠遁の棲みか」と対し、また三十、謝靈運の「齋中説書」に、「昔し余れ京華に遊ぶ」。

21 当時の長安では、政府の御用商人が、しばしは文士のパトロンであった。「杜甫私記」第一卷二二頁参照。〔扣〕門扉のノックカーをノックする。「富兒」金もちをいやしめていう語。宋の鮑照の「少年の時より衰老に至る行の代えうた」に、「富兒の隣りに出入す」。

22 「肥馬」大官のりもの。そのあとをおっかけるのは、就職運動のためである。哥舒翰、張均、鮮于仲通ら、大官の知遇を求めた詩の何首かは、つぎの巻二に見える。

23 「残杯」「冷炙」北齊の顔之推の「顏氏家訓」の「雜芸」篇にも、この語がある。

24 「到处」口語的でない方。杜詩ここだけに見える。「悲辛」「辛」はもとからい味。またそのような気もち。この語「文選」には見えないが、宋の鮑照の「野鶴の賦」に用例がある。

25 「主上」むろん玄宗皇帝をさす。「頃」近い過去をいう語。「見徴」「見」は敬語。「徴」はめし出す。天宝六年、七四七、三十六歳、皇帝の特旨による特別試験に、受験資格者として、召し出されたことをいう。なお「主上」の語、「文選」の散文にはしばしば見え、ことにその五十一、漢の王褒の「四子講徳論」が、宣帝をほめて、「允に主上を推して、風俗を弘め、太平を聘し、いまにせんと欲す」が、杜甫の連想にあつたらう。しかし「文選」でも、詩の語としては用いられず、杜詩もこのみに用いる。

26 「欬然」忽然とほおなじ。「文選」二、「西京の賦」の注に、「欬の言は忽也」。のちの12「高都護驃馬行」の注2をも参照。「欲求伸」「易経」の「繫辭伝」下篇に、「尺蠖」しゃくとり虫の「屈するは、以て伸ぶるを求むるなり」。

27 「青冥」あおぞら。「楚辭」屈原「九章」の「悲回風」に「青冥に摠りて虹を摠ぶ」。鳥の遊ぶ場所としてのそれは、おなじく「楚辭」の王逸「九思」「悼乱」の篇に、「玄き鶴は高く飛びて、青冥に尊逝す」。その注に「青冥は太清なり」。音声の姿としては、青冥に尊逝す同母音を重ねた「疊韻」の語。「却」あべこべに。自由な飛翔の場所であるべき「青冥」が、思いきやあべこべに。「垂翅」失意の鳥のごとく、つばさを垂れる。もと後漢の光武帝が、敗軍の将、馮異をなぐさめた語。

28 「躡蹠」やはり ceng dang と同母音をかきねた「疊韻」の擬態語。文選十二、晋の木華の「海の賦」に、海中の大魚が不慮の死に近づいて狼狽する様子を、「窮波に躡蹠す」。その李善の注に「勢を失う貌」。「縱鱗」自由に泳ぎまわる魚。「文選」十七、漢の王褒の「聖主の賢臣